

プへ帰りました。

四月二十八日、本物の内地送還の命令がきました。英軍の二百人が交代で内地へ行く便に便乗することになり、憲兵十一人と一般の他部隊百人が乗船できました。準客船で、シンガポールから八日間の船旅で宇品港へ着き、検疫をし、復員完結したのは昭和二十二年五月七日で、そこで初めて予備役編入となりました。

我々憲兵は職務上、馬來共產党を取り締まったり、防謀のため取締りもし、また治安維持に任じたりしていました。勝てば勝った国の裁判で裁かれ、弁護士もない判決に従わねばならなかったが、我々のことが戦後タイプライターに打ち込まれていたように、それを証拠に戦犯となったのでしようが、あちらの立場での情報が打ち込まれていたわけでした。

戦後の労役は、報復労働が半分で、次には一般労働となったのですが、下士官は次から次へと絞首刑になったと聞きます。シンガポールのC級戦犯裁判で闇から闇へと葬られた人もいます。

私の取締官は印度の高等弁務官だという中尉で、そ

の人が仏教信者であったので、私が僧侶と知って輪袈裟と念珠は持たせてくれました。これは、御釈迦様のお陰でした。弁務官は日本語が良くできた人で、そのために作業隊へ回され寛大な措置をしてもらいました。今から十年前と十三年前、私は印度の弁務官をコンボで捜したのですが見付けることができませんでした。去年、シンガポールに行きましたら、当時の憲兵隊跡は公園となっていました。内地へ帰って、昭南憲兵隊の人と二〜三人は連絡がとれました。

労苦体験記

富山県 荒木長市

トラック島より生還しての思い出

私は昭和十六年三月、富山第六十九連隊に現役として入隊、三カ月第一期の検閲を終えて、下十候を志願、連隊の試験にどうにか合格し、第九師団の集合教育が始まる。任官まで一年九カ月間、金石廠舎にて、富山、

金沢、松本の三個連隊の集合教育である。昼は実習、夜は学科と、実習と学科では教官は別である。学科では一番苦手な数学にはまいった。

朝は起床と同時に駆け足。金沢までの四キロである。次に海に向かっての号令調整、幹部としての基礎教育と軍人精神を徹底的に叩き込まれる。いかなる状況下でも指揮の出来得る心構えを教わったのである。

昭和十八年一月一日付けで伍長に任官、中隊に復帰し初年兵の（一期補充兵）の一期教育をする。初年兵の教育はともかく、補充兵の教育にはまいった。三、四歳年上で全くやる気のない者が多くて事故ばかり続く。ある時の演習中に、小銃の部品を落として中隊へ帰らず、午後の訓練まで昼食も取らずに皆で探したが分からない。そのまま午後の集合場所へ昼食抜きである。午後は駆け足訓練で内心ちよっと気掛かりでしたが、幸い無事に終えた。しかし後で教官の耳に入り注意を受けたこともあった。

十月、大東亜戦争のための編成により、第一大隊の本部付きを命ぜられ、わが富山部隊は、南方ミクロネ

シア群島トラック島内の水曜島とうしよ島嶼防衛の任務である。十二月暮れも押し迫った二十二日、富山連隊を後にして暗闇の中を連隊橋を通らず駅へ、鍍戸を下ろして薄暗い車内へ入る。だれも声する者なく、こそこそと、富山ともお別れして字品へ。ごった返している中を、オンボロ貨物船に乗船した。

いよいよ太平洋に向け出航である。波は静か、軍装のままや々と横になれる雑魚寝、だんだんと波は高くなり大揺れで床のコップも倒れそうで沢山の兵は船酔いである。甚だしい者は目的地まで一食も取らず、痩せ細ってもう駄目かと思ったこともあった。

前の船団も魚雷を受けたとか、いつ我々の船も敵潜の犠牲になるかもしれないが、出発から十六日間を経て、昭和十九年一月十二日、ようやく目的地水曜島に上陸した。ここは自然そのもの、椰子の実はたわわに、バナナ林は緑一色、白い砂浜、青き海、全くの別天地である。大隊長と釣りをしたり、各中隊をのんびり巡視、時には途中喉が乾いてしようがなく、椰子の樹を見上げるがあいにく島民もいない、仕方な

く登ったことのない椰子の木へ、どうにか登って実を落とし、軍刀で切り割り、二人で飲んだこともあった。しかしそれも束の間であった。

思えば一カ月余りこれが戦地へ来ているとは思わないう楽しい一時でした。二月十七日、米軍の大空襲となる。さてこれからが大変であった。翌朝未明夏島へ転進命令、トラック諸島は日本の真珠湾で、周囲二百キロの環礁に抱かれて四季四島、七曜諸島をはじめ大小百余の島々からなっていて、主要水道以外は容易に進入できない島である。我が第四艦隊の基地でもあった。

我が隊は夜明け前にと夏島へ上陸開始、水曜島へ上陸前のあの威容を誇る艦隊の姿はどこにもなく、退避したのだろうか。連合軍の爆撃銃撃により重油タンクも炎上し火の海と化していた。乱舞する敵機、耳をつんざく機銃掃射の中を上陸、どこにも身を隠す物陰とてなく、ただ漠然と敵機を睨んでいるだけ、もとより死は覚悟、来るものが来たかと当時は案外落ち着いていたようで余り怖れてもいなかったように思う。

それから一年有余、悪夢のような日々が続く。竹島

飛行場では百機以上の飛行機が撃破され、全く敵のなすがままである。この二日間だけで大変な戦死者が出た様子で、一千人とも一千五百人ともいわれた。神社拝殿は吹っ飛び、鳥居のみが無残にも横たわっている。攻撃は一応途切れ、幸い国民学校が無事に建っていて、ここで中隊ごとに各部所へ分散することになる。大隊本部は、ある空き家に陣取る。私ら下士官室兼居室はトタン葺きの床柱だけの粗末な建物で、板の上に麻筵を敷いただけ。幸いトラック島は常夏の国で毛布一枚あれば沢山、ただ問題は夜一年中蚊帳の中である。各中隊は敵の爆撃に備えて防空壕を掘り、敵攻撃の間断を見て、エンピ（円匙）で穴掘りに明け暮れる。

敵は時機を見てか照明弾で夜を照らしてフワフワとなかなか消えそうになく、しかも真昼のようで、その中を悠悠と偵察、続いて焼夷弾を雨のごとく投下するのが毎日のようにしばらく続く。平地に露出した建物施設など一切破壊する作戦だろうか。一メートル前にも落ちたこともある。焼けたあの六角型の焼夷弾がゴロゴロあちこちになっている。我が居室は不思議

なことに焼けずに建っている。数少ない友軍機はどうなっているであろう。たまには二〜三機、敵機と空中戦をやっているが撃墜され、我が高射砲も猛烈に火を吹いているが全く当たらず、敵機は悠悠と編隊も乱すことなく去って行く。

これからがB29のお出ましで十機ほどの編隊で轟轟と、今度はどこと目標を決めてるのだろうか、一斉に黒い塊を糞のように投下するので壕に駆け込む。ガンガンと落とすは落とす、つんざく炸裂音、体も宙に浮く爆風、去った後出て見れば一面の砂塵が濛濛と立ちこめて何も見えない。これが毎日のように繰り返された。大体一発の爆弾で直径二〇メートル深さ四メートルほどの穴が開く。無数に投下されれば島も変形してしまう。

そうしたことで電話線は切られ電話は不通、通信器材も駄目となり、私が進んで大隊長の命を受け連隊本部へ。連絡に約二キロの行程であるが、そのとき、あいにく米軍の艦砲射撃を受ける（艦砲射撃は終戦までこれが一度だけ）。頭上をヒューンヒューンと飛んで

炸裂、軍刀を握り締めて本部へ、日ごろと変わらず怖いとも思わず落ち着いたものでした。

今まで掘った防空壕は浅くて全く問題にならず、爆撃を受けてベッチャンコ。四名の兵は無残にも形をとどめない死体で、壕から抱え上げ大隊長の命令で火葬に、これが初めて終わりになろうとは思ってもいなかった。だんだんと状況は悪化、これからの戦死者は火葬どころか穴を掘って皆埋めた。また防空壕に直撃を受け、中隊の兵もたくさん戦死した。今でも壊れた壕の下に十名以上の兵が残っているはずである。私も連絡先で壊れた壕に入らず助かったこともあった。

食糧も吹っ飛び、輸送の方法もなく、だんだんと米は少なくなり、連隊長の命により食糧一カ月分を最後の決戦食として岩盤の中へ。兵が幾ら餓死しようと絶対手をつけないよう固く封印。これからまた大変である。山を開墾して各中隊ごとに甘藷の畑作り。常夏の地ですから掘ってはまた苗を植えるが、だんだんと土地が痩せて収穫が悪くなるばかり。取った甘藷を入れる袋は米の入っていた空き麻袋、その袋の匂いを嗅い

で故郷を懐かしんでいる者もいる。

食事はほとんど諸の中に飯粒が数えられるほど、私ら下士官居室でもどうにも腹が減って眠れないことが幾度かあった。ある下士官がパイヤの木を取ってきて皆で分けあって食べたこともある。地上の生き物は皆食べ尽くしてしまい、海水を汲んでの塩作りもしばらく続いたが、これもままならず、海水に諸の葉を入れて煮たてた汁を大海汁といった。また魚を捕るため爆破された飛行場の弾丸から火薬を取り出し、缶に入れ捕りに出掛けて失敗して死んだ者もいる。米軍の機銃掃射で死んだ者、目の前の出来事でした。諸畑も盗みに入ることが頻繁となり、各中隊ごとに夜警二名を付け、盗みに入る者は島民であれ日本軍であれだれ彼なく射殺されても文句なし。そうして死んだ者もいる。私も進んで夜警に就き地面に伏して拳銃を構え今や遅しと待っていたがこなかった。

空襲の合間に軍旗祭があり、歌の上手な兵には賞品として甘藷一個もらった者もいた。それほど貴重な物でした。体験者でないとは分らないことです。激しい空

襲は毎日のように決まってやって来るが、そうしたことより栄養失調で沢山の兵が死んでいく。特に軍属の方が多かった。骨と皮のようになった体を板に乗せて穴の中へ運ぶ。米軍はトラック島を置き去りにして、サイパン、硫黄島の玉砕、沖繩へ上陸、本土決戦と、無線で分かっていたから、毎日のように身を清め、今日一日命があったかと戦友と笑い合ったこともあった。日に日に一段と状況が悪化し、主食の甘藷も乏しくなり、島民主食のパンの実(パンの木になる)で補う。それも爆破されずに残った木から。いよいよ行き詰り、これが終戦二〜三カ月前のことである。終戦がもっと遅れていたなら、どうなっていただろう。

八月十五日終戦となり、陛下の御言葉が無線を知る。いよいよ来てしまったかと、思えば生死を境にしたことが幾度か、また生きて帰るなんて思ってもいなかったから、米軍の上陸前に機密兵器は海中へ、焼ける物は一切焼却、全員丸腰、階級章も取り上下なし、軍刀も兵器も一切浜辺に並べた。あの無念さは今もはっきり目に焼き付いている。

トラック島丸腰となり終戦日

三、四日経て米軍上陸、使役に使われる身となった。階級なくても米軍の指示により兵二十名程度だったか指揮して配管工事に就く。驚いたことは宿舎用水の配管その他においても全く感心しっ放し。備品その他についても手早く、やり方が違う、私たちの想像もつかないことをやっていたのける。

こうしたことが四カ月近く続いたが、この間の食糧は、幾ら兵が餓死しようとも使わなかった決戦食糧に手を付けどうにか凌いだ。米軍の援助はない、たまたま煙草、チョコレートをくれるぐらいであった。

年の瀬も迫る十二月二十日ころかと思いますが、いよいよ帰還とのこと。大隊本部は一番先に海防艦に乗船とのことで、その前に米軍の上陸用舟艇に乗らねばならず、米軍は浜辺で厳しい私物検査を始める。裸で禪までヒラヒラと前丸出して、どうにか将校、士官が乗船。動き出して海防艦乗船までに二人の米兵が腕時計を奪いに掛かった。一人が状況判断で時計を外し、ポケットへ入れて知らぬ顔をしていたが腕に跡が付い

ているので駄目。結局大隊長以下二十名全員の時計は巻き上げられ海防艦へ。

日本への帰国は、来たときとは違って早く、六日間ほどで着き広島へ上陸。軍歴書など整理し、正月に間に合うようにとの取り計らいで十二月三十日ひょっこり帰宅しました。

今は幸せに感謝の気持ちでいっぱいです。亡き戦友を偲び余生を送っていますが、今思うと考えられないことです。

砲兵科の志願下士官

ハルマヘラ島で船舶廠勤務

石川県 水口 久 助

私は農家の長男として生まれたが、父母、祖父母も健在であったので、小学校卒業の昭和十三年十月から、元片倉製糸、金沢の日本紡績に勤務した。しかし、大正十二年二月十七日生まれであり、十八年徴集であっ